

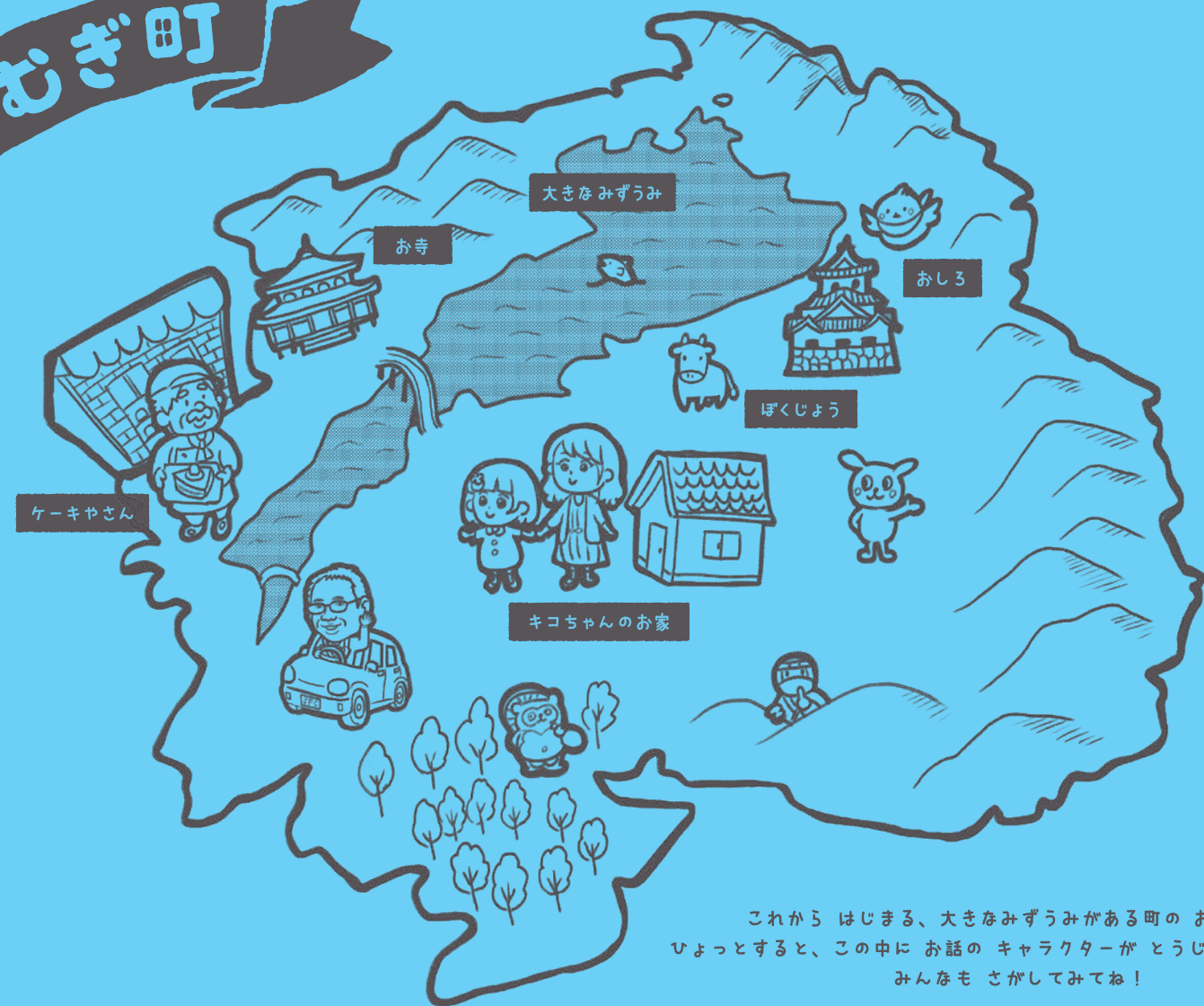
キコちゃん🍓ケーキ屋さん

にっぽんせいさくきんゆうこうこ
さく・日本政策金融公庫

みずさき ゆか
え・水崎 由佳



つむぎ町



これから はじまる、大きなみずうみがある町のお話だよ。
ひょっとすると、この中にお話のキャラクターがとうじょうするかも…？
みんなもさがしてみてね！

キコちゃんとケーキやさん

さく・日本政策金融公庫 え・水崎 由佳



キコちゃんは、とっても やさしくて 元気な 女の子。
今日は、ママといっしょに おでかけです。



だって今日は、キコちゃんの たんじょうび！
だいすきな ケーキやさんへ行って、とびっきりおいしいケーキを 買いにいくんです。

洋菓子店フィレル

お店の^{みせ}前^{まえ}にくると、
キコちゃんの だいすきな
あまいにおいが ふわっとします。

でも、なんだか いつもとちがって
お店の^{みせ}ドアに ^{かみ}紙がはってありました。



「ママ、これ何て ^{なん} ^か書いてあるの？」

^{かみ}紙を見た ママは、
おどろいた^{こえ}声で ^い言いました。
「まあ、このケーキやさん、来月で
お店を ^{みせ}やめるって ^か書いてあるわ！」

キコちゃんは それを^き聞いて びっくり！

キコちゃんは いそいで ドアをあけて、
ケーキやの おじさんに 聞き^きました。

「おじさん！ケーキやさん、やめちゃうの？ほんとう!？」

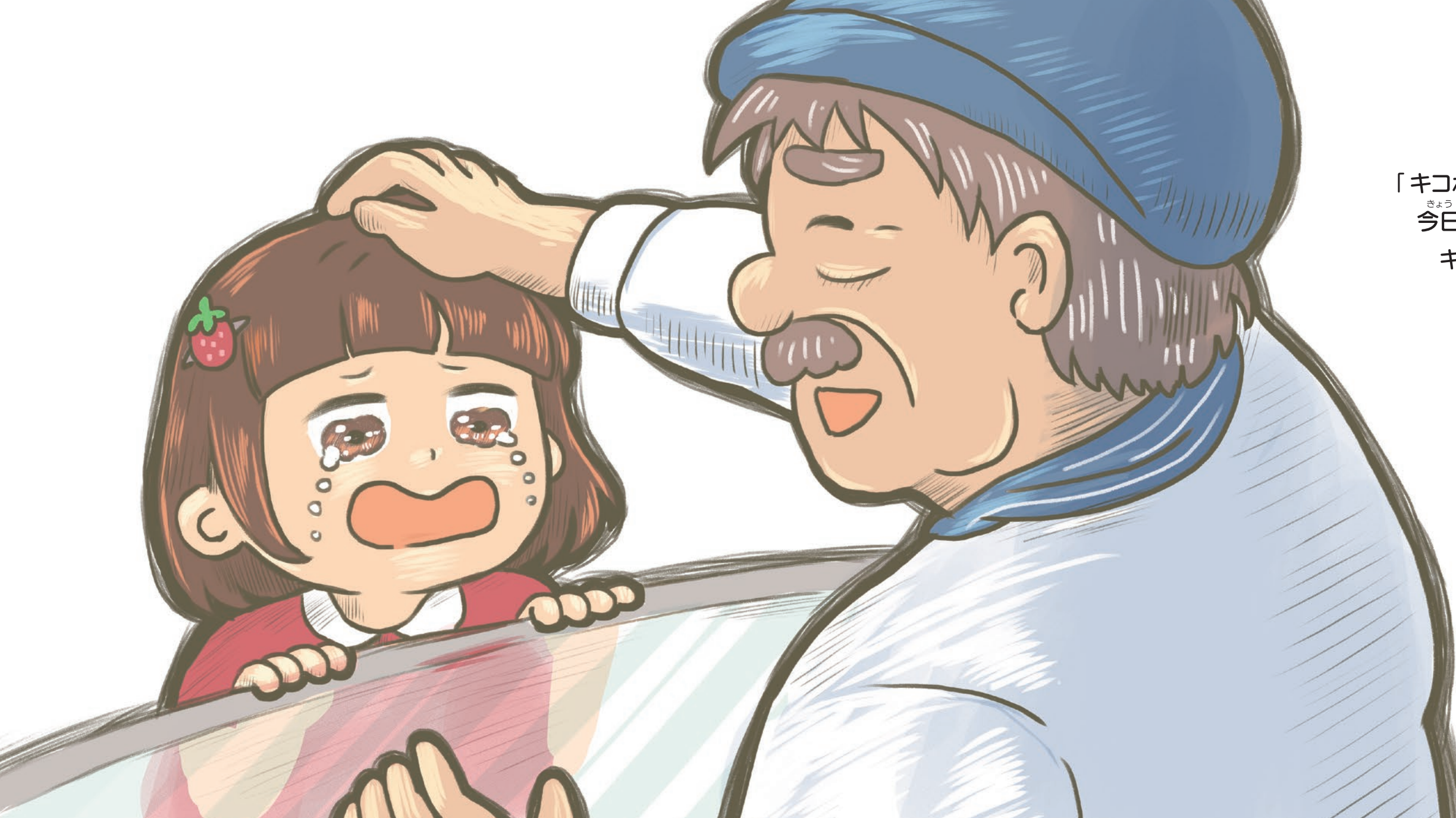
おじさんは、ちょっと こま^{かお}った顔で
言^いいました。

「そうなんだよ、来^{らいげつ}月で
お^{みせ}店を やめるんだ」

「どうして…？」

こんなに おいしいケーキなのに！」





「キコね、おじさんの いちごのショートケーキ だいすきだよ。
今日だって、たんじょう日の ケーキを 買いに 来たんだよ」
キコちゃんは かなしい気もちになって、なみだを ポロポロながしました。

「もう、おじさんのケーキ 食べられないの？」

ないている キコちゃんに、おじさんは やさしく声を かけました。
「うちのケーキを そんなに すきでいてくれて、ありがとう。
でもね、おじさんは もう“とし”で 体が つかれちゃったんだ。
それに、このお店を ついでくれる人も いなくてね。
本当は、まだ つづけたかったんだけどね」

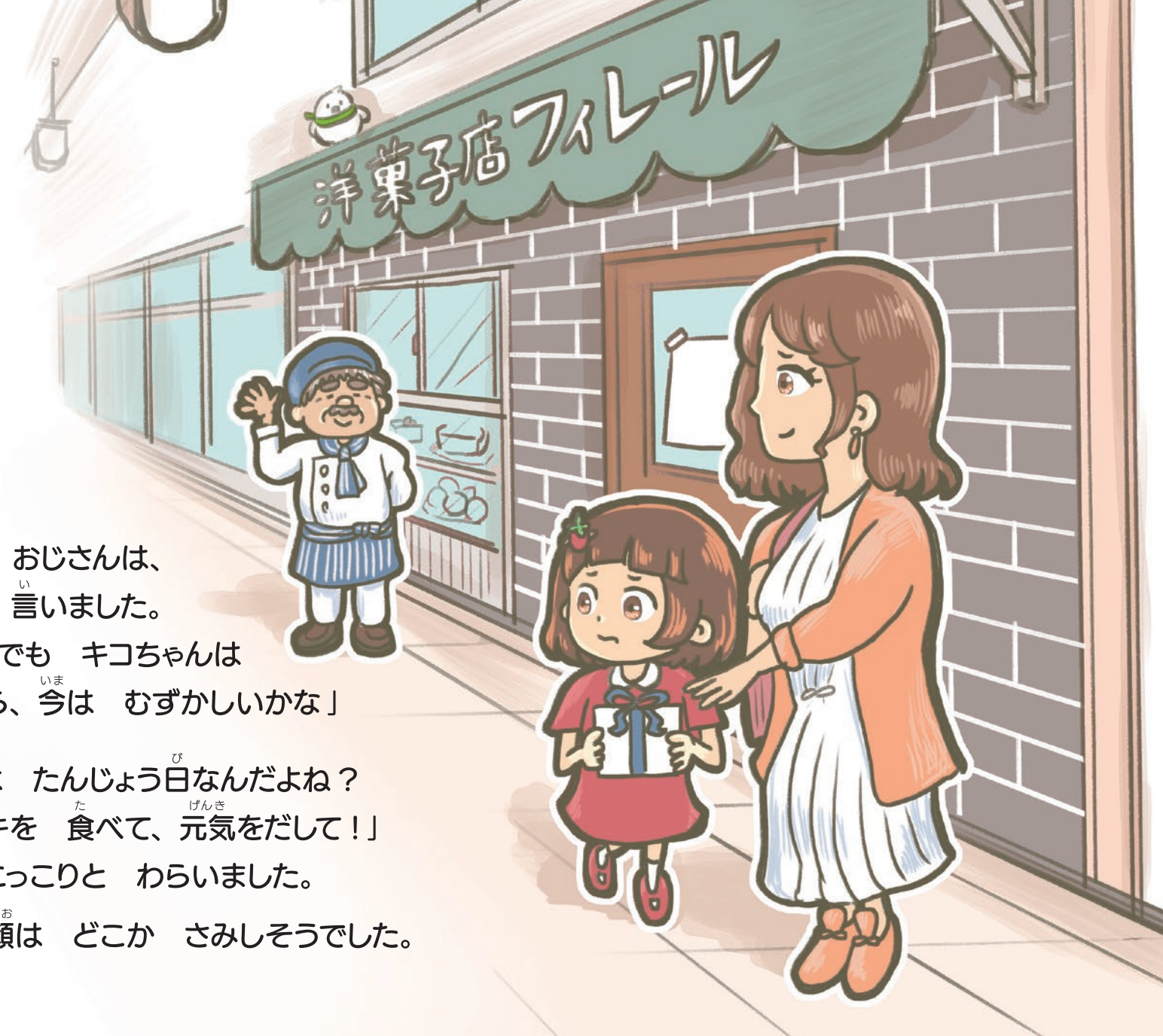
「じゃあ、だれかが おじさんのお店を ついだらいいの？」
キコちゃんは、なみだを めぐって 言いました。

「それなら キコが やるよ！」

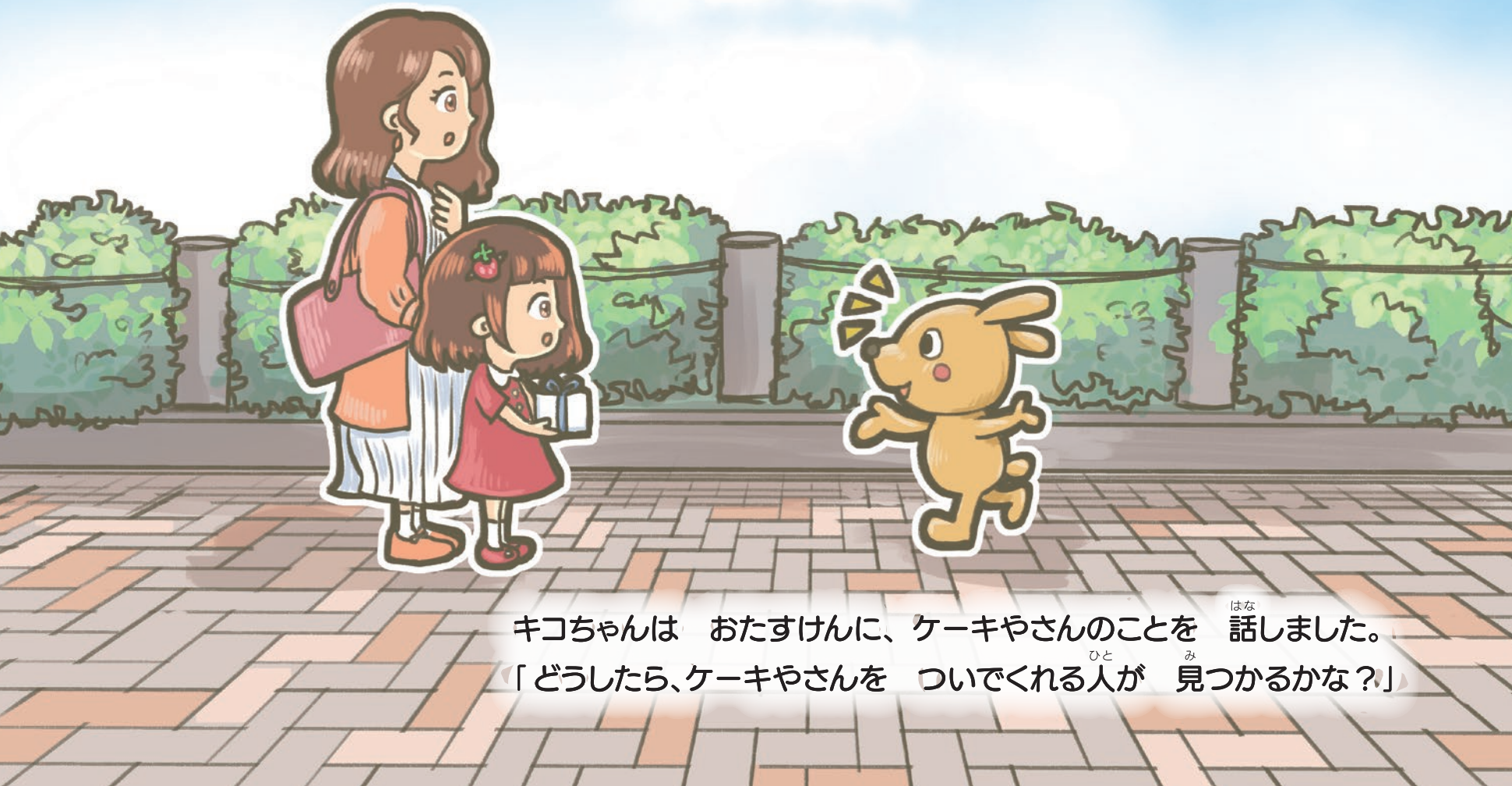


それを聞いた おじさんは、
やさしい声で 言いました。
「ありがとう。でも キコちゃんは
まだ小さいから、今は むずかしいかな」

「さあ、今日は たんじょう日なんだよね？
おいしいケーキを 食べて、元気をだして！」
おじさんは、にっこりと わらいました。
—でも、その顔は どこか さみしそうでした。



ケーキやさんからの^{かえ}帰り道、だれかが キコちゃんに ^{こえ}声をかけてきました。
「どうしたワン？ なにか こまったことが あったワン？」
^{こえ}声をかけてきたのは、こまっている^{ひと}人を たすけてくれる “おたすけん” でした。



キコちゃんは おたすけんに、ケーキやさんのことを ^{はな}話しました。
「どうしたら、ケーキやさんを ^{ひと}ついでくれる人が ^み見つかるかな？」

「それは こまったワンね… う～ん… そうだ！」

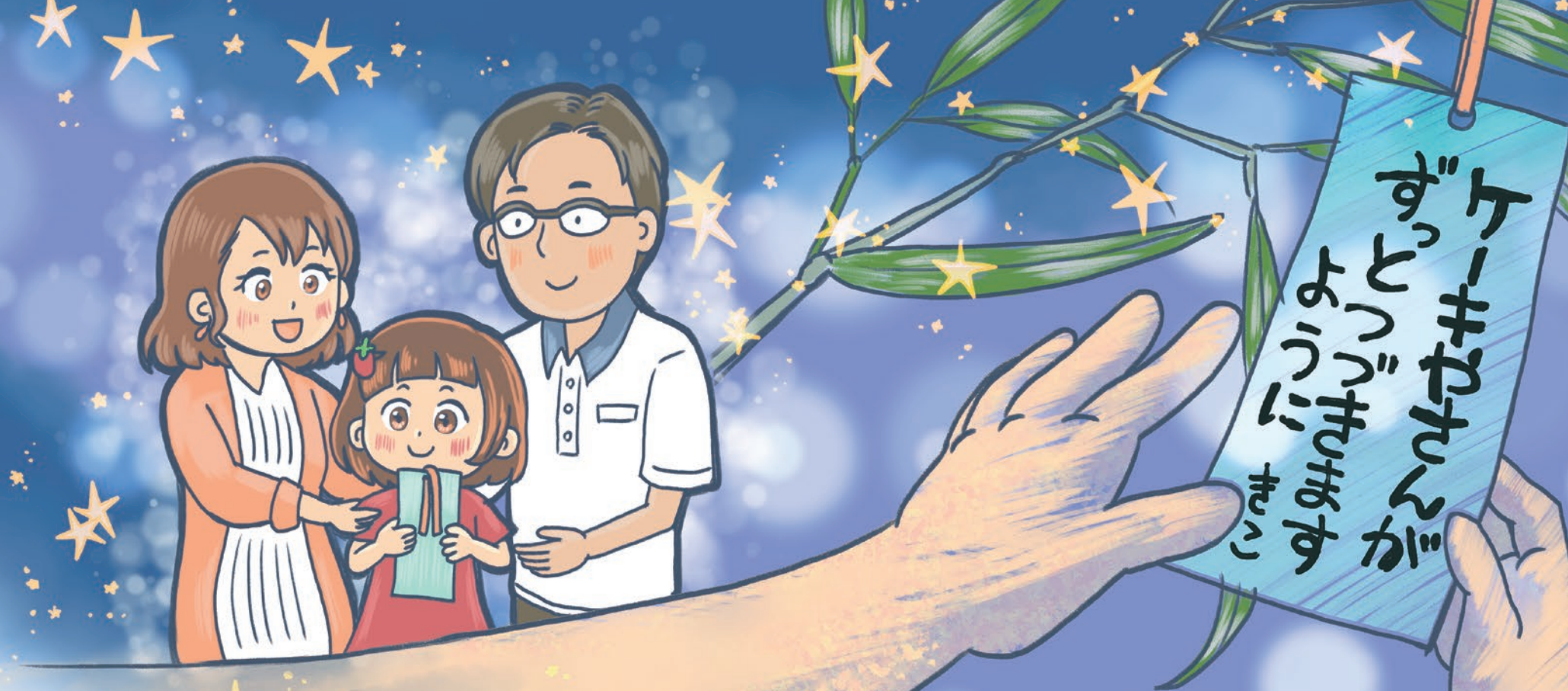
おたすけんは、なにか ひらめいたみたいです。





「もうすぐ ^{たなばた}七夕だワン。
ねる前^{まえ}に ^かねがいごとを書いた ^{たんざく}たんざくを
まぐらのそばに かざると、ねがいを かなえてくれる
ふしぎな鳥^{とり}が やってくるらしいワン！」

「ほんとう!?
じゃあキコ、おねがいしてみるね！」



^{たなばた}七夕の夜、^{よる}キコちゃん は ^{パパ}パパと^{ママ}ママと ^{いっしょ}いっしょに
^{たんざく}たんざくに ^{ねがいごと}ねがいごとを ^か書きました。

そして

「ふしぎな鳥^{とり}さんに ^{とどきます}とどきますように」
そう言いながら、^{たんざく}たんざくを ^{七夕}七夕かざりにかけて ^{ねむ}ねむりました。

すると、とつぜん まどの外が ^{そと}ぱあっと ^{あか}明るくなりました。
ふしぎな光が ^{ひかり}まどから ^{はい}入ってきて、へやの中を ^{なか}ぐるぐると ^{うえ}かけまわります。
^{たなばた}七夕かざりの ^{ちか}近くに行くと、光は ^{ひかり}たんざくの上に ^{とり}とまりました。
やがて ^{ひかり}その光は ^{かたち}みるみる ^{はな}鳥の形にかわり、キコちゃんに ^{はな}話しかけてきました。



「^{なまえ}ぼくの ^{ひと}名前は“コウコトリ”。
こまっている人を ^{ひと}たすけるために
やってきたよ。
ぼくを ^{ひと}よんだのは、きみ？」

キコちゃんは びっくりして
まんまるな^め目で コウコトリを ^み見つめます。
「あなたが ^{ねが}いごとを ^{かな}えてくれる ^{とり}鳥さんなのね！
わたしは キコっていうの！！」

「キコちゃんだね、はじめまして！
それじゃあ ぼくが これから
キコちゃんの ^{ねが}いをかなえる
お^て手つだいをするよ！！」



コウコトリが ^いそう言うと、^かねがいごとを書いた たんざくが、
ふわりと ^{そら}空に うかびました。
コウコトリは、なにやら ふしぎなことばを ^い言いはじめました。

「コウコ^り コウコ^り
ジギョウ・ショウケイ・マツチングー!!!」

←すると、たんざくのまわりに ^{ひかり}たくさんの光が あつまってきました。



よくみると、光の中には たくさんの 人の顔が うつっています。
「コウコトリさん、この人たちは だあれ？」
キコちゃんが ふしぎそうに たずねました。

コウコトリは にっこりわらって 言いました。
「この人たちは、ケーキやさんを ついでくれるかもしれない人たち だよ」
「こんなに いっぱい いるの!？」
「そうだよ。でもまだ、あのケーキやさんと “えん” が むすばれてないんだ」

「キコちゃん、ぼくが“えん”を むすんであげるから
このたんざくを 気になる光に 近づけてみてごらん？」
コウコトリが そう言うと、たんざくが ふわりふわりと 目の前に。



キコちゃんは、ひときわかがやく光に たんざくを 近づけて こう言いました。
「キコの だいすきなケーキやさんが このままだと なくなっちゃうの。
だからどうか、ケーキやさんを ついでください!!」



キコちゃんが ねがいごとを言うと、たんざくが 光に^{ひかり} むすびついで
よりいっそう、まぶしく かがやきだしました。

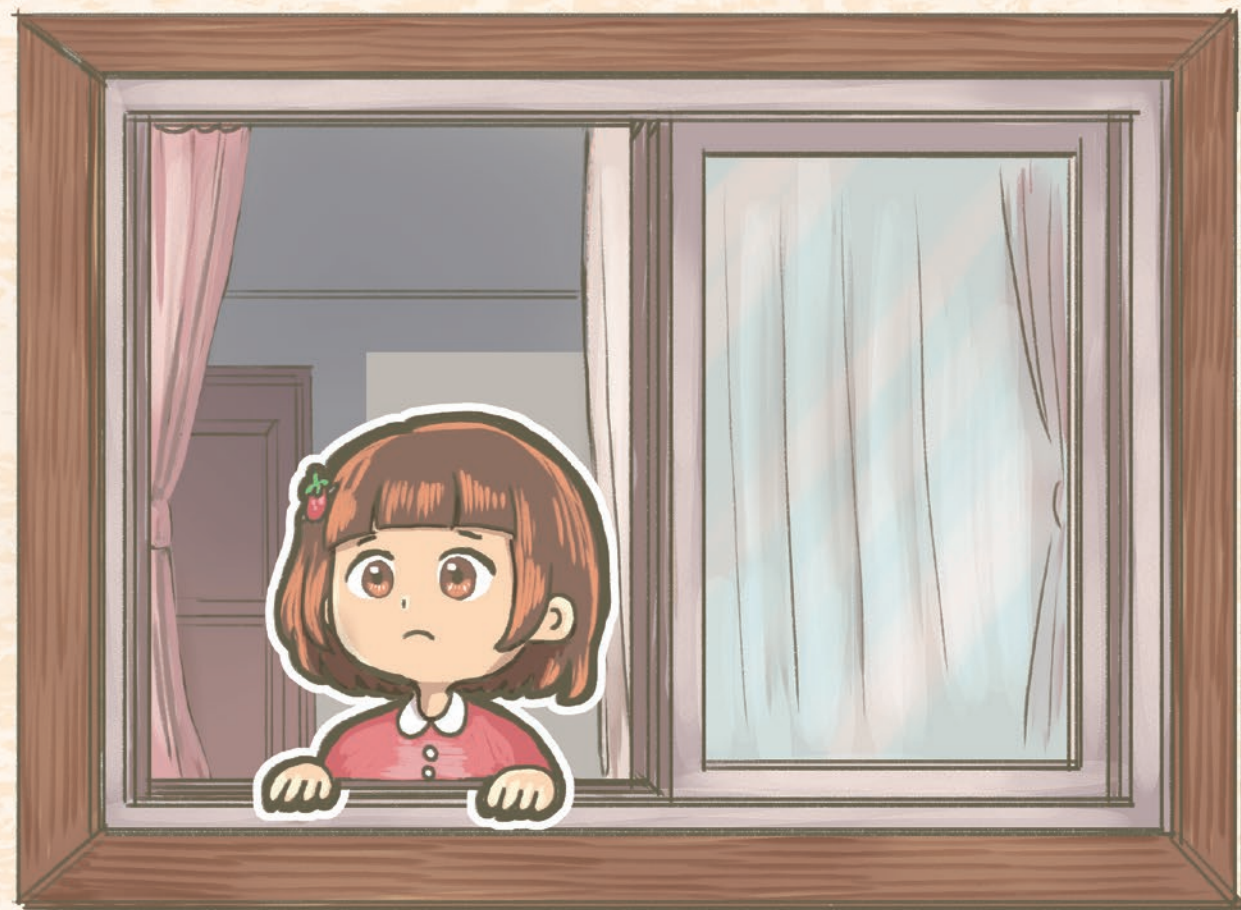
あまりにも まぶしくて、
キコちゃんは 目を つぶてしまいました。



キコちゃんが 目をあけると、なぜか ベッドの上^{うへ}で ねていました。
ちょっと ねぼけたかんじで まわりを見わたしましたが、
ふしぎな鳥^{とり}さんは どこにも いません。
まぐらのそばの たんざくも、七夕^{たなばた}かざりに かかったままでした。



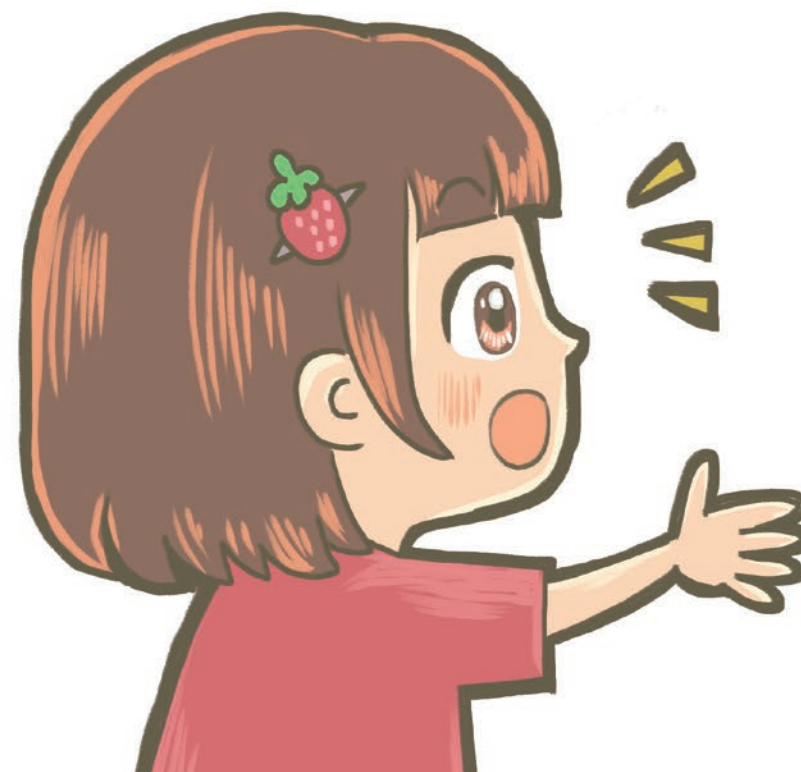
「ゆめだったのかな…？」
キコちゃんは そうつぶやきました。



七夕^{たなばた}が おわってからも、キコちゃんは ふしぎなゆめのことが 気^きになっていました。
「ふしぎな鳥^{とり}さんが、たんざく^かに書いた おねがいを かなえてくれたら いいのにな…」

すると、ママが やってきて…
「ねえねえ キコ、大^{だい}ニュースよ！あのケーキやさん、
また つづけられることに なったんだって！」

キコちゃんは それを聞^きいて びっくり！
「ほんとう!? ケーキやさん、なくなるの!?」



「なんだか、ケーキやさんを ついで^{ひと}でくれる人が
見^みつかったんだって！
おじさん とっても よろこんでるみたいよ。
これから お店^{みせ}に 行^いってみない？」

キコちゃんは それを聞いて、
ぱあっと えがおを かがやかせながら、
ママといっしょに ケーキ屋さんへ むかいました。

お店の^{みせ}前に^{まえ} 行くと、
おじさんが にこにこしながら
はり紙^{がみ}を はがしていました。

キコちゃんは おじさんに かけよって
うれしそうに 聞き^きました。

「こんにちは おじさん！
ケーキ屋さん つづけられるって ほんとう!？」



「そうなんだよ！」

じつは あのあと、おじさんのお店を ついでくれる人が あらわれたんだ！

このお姉さんはね、ケーキやさんに なりたくて

遠くの町で しゅぎょうして いたんだけど、

ぐうぜん おじさんのお店が

こまっていることを して、

来てくれたんだよ！」



お姉さんは にこっとわらって、キコちゃんに 話しかけました。

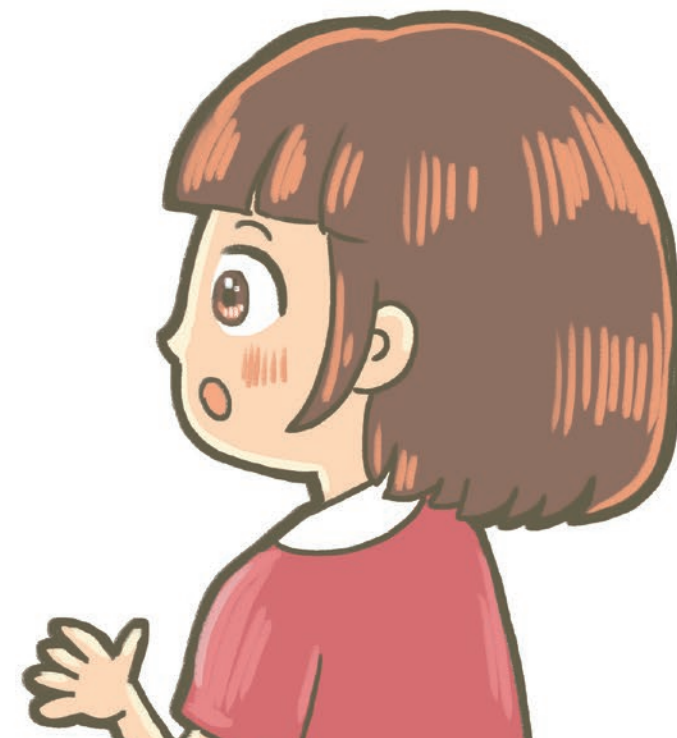
「はじめまして！あなたが このケーキが だいすきな キコちゃんね！」



キコちゃんは、何だか ふしぎなかんじが しました。

はじめて会ったはずなのに、お姉さんと どこかで

会ったことがあるような、そんな気がするのです。





お姉^{ねえ}さんは、ショーケースに ならんだケーキを 見^みながら 言^いいました。
「わたし、小^{ちい}さいころから ここのケーキが 本^{ほん}当^{とう}に だいすきだったの。
だから、このお店^{みせ}が なくなっちゃうのは とってもさみしくて
わたしに つがせてほしいって おねがいしたのよ」

それを聞^きいて キコちゃん^{きこちゃん}は、おじさん^{おじさん}に 言^いいました。
「じゃあ、キコのだいすきな いちごのショートケーキ
これからも ず^たっと 食^たべられるの？」

「もちろん！ お店^{みせ}のレシピも し^おっかり教^{おし}えるから、
あじも そのままだよ！」



「そうだ、これは この前^{まえ}
なかせちゃった おわびだよ」
そう言^いって、おじさん^{おじさん}は
ショートケーキを
プレゼントしてくれました。

いえ 家への 帰り道、
キコちゃん は 空をとぶ鳥を 見つめて 足をとめました。

「どうしたの？ 鳥さんが 気になるの？」
ママが そう聞くと、キコちゃん は 言いました。

「キコ、大きくなったら ケーキやさんに なりたいんだ。
でも、ふしぎな鳥さんみたいに こまっている人を たすける人にも なりたいな！」

ママは ふしぎそうに 首をかしげました。

「ねえママ、はやくお家に帰って ケーキ食べよう！」
キコちゃんの うれしそうな足音が、すみきった青い空に ひびいていきました。



キコちゃんとケーキ屋さん

2026年 7月 7日 第1刷発行

作：日本政策金融公庫
絵：水崎 由佳
デザイン：中野 春香

発行者：日本政策金融公庫 大津支店・事業承継支援室（事業承継支援第二グループ）
発行所：日本政策金融公庫 大津支店（〒520-0051 滋賀県大津市梅林 1-3-10 滋賀ビル）
協力：滋賀県 / 滋賀県事業承継・引継ぎ支援センター / 大阪府事業承継・引継ぎ支援センター

© 日本政策金融公庫 2026



あとがき

この絵本を手にとってくださりありがとうございます。
キコちゃんの大好きなケーキ屋さんが、後継ぎがないというだけでなくなってしまう…
みなさんは、どのように感じましたか？

- ・ どうしてこんなに地域で愛されているお店が!？
- ・ 後継ぎがないだけで閉店なんて、もったいない。

きっと、キコちゃんの泣いてしまう気持ちに、共感した人も少なくなかったはずです。
そう、“後継ぎがない”ということは、そのお店だけの問題ではなく、
私たちの日常生活にも影響する、意外と身近なことなのです。

絵本を読み終えた、お子さまや親御さま、そして、今まさに後継ぎがない経営者の方に、

- ・ 後継ぎの問題って、私たちの生活の中に潜んでいるんだ
- ・ 地域のために、後継ぎのことを考えないと

と、一人でも多く感じていただけたら嬉しいです。

そして、日本政策金融公庫や事業承継・引継ぎ支援センターといった、
後継ぎ探しを支援する公的機関の存在も知っていただける、そのきっかけにもなれば幸いです。

日本政策金融公庫 大津支店・事業承継支援室（事業承継支援第二グループ）

日本政策金融公庫の実際の支援内容に関して、少しでもご興味をもってくださいましたら、
右の2次元コード（もしくは下記 URL）よりご覧ください。

▶ <https://www.jfc.go.jp/n/finance/jigyosyokei/matching/index.html>

事業承継
マッチング支援

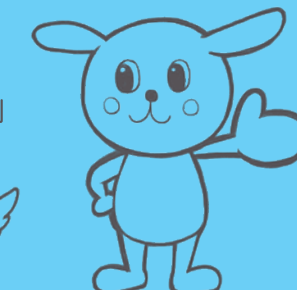


日本政策金融公庫
公式キャラクター
「コウコトリ」



大阪府事業承継・引継ぎ支援センター
公式キャラクター

たすけん
「お助犬」



●この物語は、日本政策金融公庫の「事業承継マッチング支援」をモチーフにしていますが、実際の支援内容とは異なります。また、絵本に登場する物語及び登場人物はすべてフィクションです。●絵本に含まれる文章及びイラスト（「コウコトリ」「お助犬」などのキャラクター、コンテンツを含みます）を無断で複製、転載、転用、販売等することはお断りします。

